

## 2025年2月2日（日）「二人の証人の死と復活」

ヨハネの黙示録 11:7-14

7 二人がその証しを終えると、一頭の獣が底なしの淵から上って来て二人と戦って勝ち、彼らを殺す。8 彼らのなきがらは、ソドムやエジプトにたとえられている大きな都の大通りにさらされる。彼らの主も、その都で十字架につけられたのである。9 さまざまな民族、部族、言葉の違う民、国民から成る人々は、三日半の間、二人のなきがらを眺め、それを墓に納めることを許さないであろう。10 地上に住む人々は、彼らのことで喜び祝い、贈り物を交わすであろう。この二人の預言者が、地上に住む人々を苦しめたからである。

11 三日半の後、命の息が神から出て、この二人に入った。彼らが足で立ち上がると、これを見た人々は大いに恐れた。12 天から大きな声がして、「ここに上って来なさい」と言うのを、二人は聞いた。そして、雲に包まれて天に上った。彼らの敵もそれを見た。13 その時、大きな地震が起こり、都の十分の一が倒れ、この地震のために七千人が死に、生き残った人々は恐れを抱いて天の神に栄光を帰した。

14 第二の災いは過ぎ去った。見よ、第三の災いがすぐにやって来る。

### 【序論】

今月は第四主日に定期教会総会を予定しています。毎年の総会では、前年度の活動報告と次年度の活動計画が話し合われます。東京福音センターも新たな時代を歩み出しましたが、当団体に属する三つの共同体の働きが常に福音宣教を中核に置いて活動を続けることができるように、その目的をいつも明確にしていきたいと思います。その働きの下にあるどんなに小さな活動も、イエス・キリストの福音宣教と直接・間接に結びついている必要があります。福音宣教の要素を敢えて四つに集約するならば、「礼拝」「弟子訓練」「聖徒の交わり」「伝道」が挙げられますが、それらすべてが一つのゴールへ向かっているのです。

### 【本論】

黙示録 11 章では「二人の証人」が出てきますが、これは終末的な教会を擬人的に描いているのでしょう。あたかも二人の人が不思議な業を行ない殉教するように描かれています。これはキリストの教会が霊的な戦いの下に置かれることを意味していると思われます。

#### 本論 1. 二人の証人の殉教

二人がその証しを終えると、一頭の獣が底なしの淵から上って来て二人と戦って勝ち、彼らを殺す。(11:7)

「二人」というのは、聖書では法廷での証言に必要な最小人数でした。つまり、一致した証言をもってキリストを証しする複数の教会というイメージです。彼らには預言の賜物が与えられており、自然界に対して不思議な力を発揮することができる（11:6）。6節まで、二人の証人は敵対者に対して優位に振る舞っていました。

ところが、今日の箇所では「**一頭の獣が底なしの淵から上って来て二人と戦って勝ち、彼らを殺す**」という、次の段階の話に移ります。「獣」は、黙示録では13-17章で本格的に登場しますが、本書が書かれた文脈では時のローマ帝国を象徴する表現でした。「底なしの淵から上って来る」とは、悪しき皇帝ネロ（在位：54-68年）の再来が暗示されているか。ドミティアヌス帝（在位：81-96年）の時代に起きたユダヤ人やキリスト教徒の弾圧も過酷さを極めたと言われます。ここでは、教会とキリスト者の撲滅運動が起きたことを記録しているでしょう。

**彼らのなきがらは、ソドムやエジプトにたとえられている大きな都の大通りにさらされる。彼らの主も、その都で十字架につけられたのである。（11:8）**

殉教者たちは、死者に対して当然払われるべき尊敬が払われず、埋葬されることもなく、「都の大通り」に放置されました。そこはエルサレムを指していると思われませんが、ソドムやエジプトにたとえられるほど墮落した町として描かれています。ソドムは倫理性の低さの象徴、エジプトは虐待と奴隷化の象徴です。死体が山また山と積み上げられた出来事として、ホロコーストを思い起こしますが、強制収容所で食べ物もろくに与えられずガリガリに痩せこけた人々の死体がブルドーザーで処理される映像が今も残されています。戦時中は、人間が人間として扱われないことが当たり前起きてまいります。第一世紀のキリスト者も、恥辱のうちに命を失っていきました。

## 本論2. 二人の証人の死を喜ぶ人々

**さまざまな民族、部族、言葉の違う民、国民から成る人々は、三日半の間、二人のなきがらを眺め、それを墓に納めることを許さないであろう。（11:9）**

ここで、虐殺されたキリスト者たちを見て喜んでいいる人々がいます。ここに列挙されている「**さまざまな民族、部族、言葉の違う民、国民から成る人々**」は、幅広い異邦人を表していると思われませんが、より具体的には「福音のことばを聞いたがらない人々」と言ったほうがよいでしょう。彼らは、教会で語られる福音のことばを聞くのが耐え難かったのです。真理に背くことが指摘され、罪と不正が明らかにされて、困り果てていたのでしょう。彼らは罪を認めて悔い改めることができませんでした。そして、聞きたくないことを語っていた人々がいなくなって安堵したのです。彼らは「三日半」という期間、祝宴を催しました。

**地上に住む人々は、彼らのことで喜び祝い、贈り物を交わすであろう。この二人の預言者が、地上に住む人々を苦しめたからである。（11:10）**

福音宣教に伴う一つの側面は、神の道から逸れて生きている人々に悔い改めを促すことです。それを聞いて心穏やかならざる人が当然出てくる。灯りは燭台の上に置いて家の中のす

べてのものを照らす（マタイ 5:14-16）のですが、その光によって隠されていたことが露わになるのを嫌がる人がいるのです。権力者の闇を暴いた人が暗殺されてこの世から消されることは、どの時代にも起きていること。不正に利益を得ていた人々にとって、自分の悪事が公にされることは迷惑なのです。キリストの証人は、主イエスの裁判が不正だったことを語り続け、ユダヤ人にもローマ人にも罪を問いつけました。その結果としての殉教とも言えるかもしれません。

### 本論 3. 二人の証人の復活

しかし、状況が一変する出来事が起きます。闇に葬ったはずのキリスト者たちが生き返る、そして崩壊したはずの群れが息を吹き返すのです。

三日半の後、命の息が神から出て、この二人に入った。彼らが足で立ち上がると、これを見た人々は大いに恐れた。（11:11）

「三日半」という期間は、主イエスが十字架で絶命してから復活するまでの時間を思い起こさせます。運命の逆転は、神から出る命の息によって起こりました。この箇所は、エゼキエル 37 章の「枯れた骨」に神の霊が入り死者が命を吹き返す記事が元になっているでしょう。

主の手が私に臨んだ。主はその霊によって私を連れ出し、平野のただ中に私を置いた。そこには骨が満ちていた。主は私にその周囲を行き巡らせた。すると、その平野にはおびただしい骨があり、それは枯れ果てていた。主は私に言われた。「人の子よ、この骨は生き返ることができるか。」私は言った。「主なる神よ、あなたはご存じです。」主は私に言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神はこれらの骨にこう言われる。今、私はあなたがたの中に霊を吹き込む。するとあなたがたは生き返る。私はあなたがたの上に筋を付け、肉を生じさせ、皮膚で覆い、その中に霊を与える。するとあなたがたは生き返る。こうして、あなたがたは私が主であることを知るようになる。」私は命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。地響きがし、骨と骨とが近づいた。私が見ていると、それらの上に筋ができ、肉が生じ、皮膚がその上を覆ったが、その中に霊はなかった。主は私に言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言え。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹いて来い。これら殺された者の中に吹きつけよ。すると彼らは生き返る。」私が主が命じられたように預言すると、霊が彼らの中に入った。すると彼らは生き返り、自分の足で立ち、おびただしい大軍となった。（エゼキエル 37:1-10）

二人の証人は教会の象徴でありますから、苦難の時代を通った教会が世の終わりに救済されることを意味するでしょう。元になっているエゼキエル書の記事は、バビロン捕囚で崩壊させられたユダの民が「枯れた骨」に譬えられ、その復活は国の再建を表しています。そして、ここ黙示録では、主イエスの証のために命を投げ出した多くの殉教者が復活することを予告しているのです。

天から大きな声がして、「ここに上って来なさい」と言うのを、二人は聞いた。そして、雲に包まれて天に上った。彼らの敵もそれを見た。（11:12）

彼らが「雲に包まれて天に上った」という描写は、I テサロニケ 4:17 の記事を思い起こさせます。

**続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることとなります。(I テサロニケ 4:17)**  
それがどういう意味で実現するのかは分かりませんが、主イエスの御手の中にある永遠の安らぎに入ることは間違いないでしょう。

#### 本論 4. 二人の証人の復活を見た人々

**その時、大きな地震が起こり、都の十分の一が倒れ、この地震のために七千人が死に、生き残った人々は恐れを抱いて天の神に栄光を帰した。(11:13)**  
今日の箇所は、二人の証人の復活を目の当たりにした人々がどういう反応をしたかについて書かれ締め括られます。キリスト者の復活と昇天の後に大きな地震が起きたとありますが、この地震は神が地に来られたことを表す特徴的な出来事でしょう。相当大きな地震であることが窺われますが、それでも最終的なものではなく、審きは部分的です。「七千人が死に」とあるように、ここで死ぬ人の数は世界規模と言えるほどは多くないのです。しかし、やがて訪れる最後の審判に対して心備えるよう、神からの警告としてこの出来事が起きたことは間違いないでしょう。「生き残った人々は恐れを抱いて天の神に栄光を帰した」と言われています。これが真の悔い改めなのか、それとも単なる恐怖にすぎないか、それは明確ではありません。両方のケースがあったと思われる。神がキリストを信じる者と共におられることを知って生き方を 180 度転換する人は幸いです。しかし、見ても信じない人もいます。自分の従来生き方をあくまでも正当化し続け、柔軟な心で神に向きを変えることができないのです。人が人生の向きを変えていただくためには、神の霊がその心に吹き込まれなくてはなりません。

#### 【結論】

今日の記事は、キリストの証人がその証言ゆえに苦しむ時代が来ることを伝えています。しかし同時に、彼らが迫害に屈して口を閉ざしたとは書かれていないことを忘れてはなりません。彼らは最後まで福音宣教の使命を果たしたのです。そして、最終的には神の霊によって復活し、永遠の安息に入りました。

このことは、今を生きるキリスト者に何を訴えているのでしょうか。一時的に悪の力が増し加わることがあっても、最終的に勝利を得るのは神と神の民であることを約束しています。だから、私たちは如何なる時代にあっても福音を語り、福音に生き続けるのです。そのような人生を歩み抜けるように、御言葉は力強く励ましを与えてくれていると思います。

### 【祈り】

時が良くても悪くても福音を語り続けることを求め給う、天の父なる神様。私たちが恐れによって口を閉ざしてしまわないようお守りください。生涯をかけてイエス・キリストの福音を証しする者であらせてください。語るだけでなく、福音に生きる者であることができますように。聖霊の息吹によって私たちにいのちを注ぎ続けてください。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

各時代にキリストの証人を立て、福音のことばを語らせ給う、父なる神の愛、死者にいのちの息吹を吹き込み、永遠に生ける者となし給う、主イエス・キリストの恵み、時が良くとも悪くとも、福音に生きる道を照らし続け給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。